

## しつけ構造についての日台比較(第二報) — その結果と考察 —

お茶の水女大 袖井孝子

○お茶の水女大 鄭 淑子

桐丘短大 長津美代子

東北大 細江容子

結果 日台で有意差が確認されたのは、次の諸変数であった。

- 1) 子とも観：日本では、「責任感のある子」「自分で考えて行動する子」「人に好かれる子」になることを願う母親が多く、台湾では、「従順ですなおな子」「責任感のある子」「親孝行な子」になることを願う母親が多い。
- 2) しつけイデオロギー：これらを測定する7項目中4項目について、両国で有意な相関が確認された。そのうち3項目は、台湾の方が伝統的である。
- 3) しつけ主体：しつけ主体者およびしつけ方針の決定者は、日本では「妻」が多く、台湾では「夫婦」が多い。しつけの中心的な場については、日本では「主に家庭で」が多く、台湾では「学校と家庭の両方で」が最も多い。
- 4) しつけ態度：台湾の母親の方が子ともに対して干渉的であることが確認された。母親の賞罰の一貫性は、台湾よりも日本の方が高い。
- 5) しつけ方法：叱り方と決った小遣いの有無で有意差が確認された。台湾では、「静かに言ってきかせる」が圧倒的に多いが、日本では、「静かに言っ、てきかせる」と「大声でとなる」が多い。日本では、85.5%の子とも月に決まった小遣いが与えられているが、台湾ではその割合は37.2%にすぎない。

台湾の社会は、農業社会から工業社会への移行期にあるが、親子関係については、今なお伝統的な側面が強く残っている。しかし、現在の指導層の多くが、アメリカで学んだ経験を持ったためか、民主的な価値観もかなり浸透しており、夫婦で子ともに対処する傾向は、日本よりもはるかに強いことが明らかにされた。